# 桐原健真「民間社会事業と「公」: 渋沢栄一を中心に」資料

**① 「特報　紙幣刷新「なぜ？」　識者透かし読み　渋沢栄一を起用　「国家主導経済再現狙う」　「令和」発表直後」『中日新聞』2019 年 04 月 11 日朝刊、24 頁**

渋沢が唱えたのが、道徳経済合一説だ。渋沢が初代会頭を務めた東京商工会議所。後の幹部は本紙のコラムに「他はどうなっても良いとの利益追求を戒めている」「個人の利益＝国家の富＝公益であり、公益となるべきほどの私利でなければ真の私利とは言えない」とつづった。結構だと思う人も、「お国のため」と感じる人もいるだろう。

**② 吉田松陰「京邸の議」1858 年頃**

凡そ京邸を守る者は、上は公卿の門に出入し、恋闕の誠を致し、以て　九重の宸襟を安んず。外は志士仁人と交遊し、天下の公論を採聴し、以て本藩の廟謨を輔け、内は文を揆り武を奮ひ、闔邸の士気を鼓舞す。

→「天下後世自づから公論有り」（朱熹『中庸或問』）との違い

**③ 『渋沢栄一伝記資料』1 巻、綱文・1 編 1 部 2 章「青年志士時代」1856 年条**

父に代り領主安部摂津守の岡部の陣屋に到りて、用金の命を受く。代官某倨傲にして、栄一を侮蔑す。栄一其の圧制を痛憤し、封建の弊に対し強烈なる反感を懐くに至る。

**④ 渋沢栄一『航西日記』1867 年 6 月 6 日条　於パリ**

此の病院は、巴里の市中に或る富家の寡婦、功徳の為め若干の金を出して創築せし由…病者はかならず病院に就て療養を請じ医療の過ちにて夭殞なく、其天然の齢を遂るをえせしむといふ。是人命を重んずるの道といふべし。

**⑤ 渋沢栄一『航西日記』1867 年 2 月 21 日条　於スエズ運河**

総て西人の事を興す独一身一箇の為にせず。多くは全国全洲の鴻益を謀る其規模の遠大にして目途の宏壮なる猶感ずべし

**⑥ 渋沢栄一「維新以後に於ける経済界の発達」1919 年 4 月　幕末滞仏時の回顧**

総じて、政治家軍人其他の官吏に付ても、日本のそれとは官民の区別がまるで違ふて凡ての人が所謂平等主義である。斯くあつてこそ然るべきものであると云ふ感じを起した。

**⑦ 渋沢栄一「第一銀行頭取辞任」1916 年 8 月**

帰朝後……官民合同の「商法会所」を静岡に発起し、金融業と商業とを兼ねたやうな事業を開始したのである。

**⑧ 渋沢栄一「秋季藪入会来会者に対する訓話」1930 年 9 月 13 日**

官は政を掌どるところであるから、人民が之れに対して心服しなくては善政は行へない、即ち官民一致して始めて善政が行はれるのである、されば政治は官民協同一致の作業であります……若し現在に於て多少とも官尊民卑の風習があるとすれば、夫れは武家政治時代の余弊で甚だよくない　→「多数政治」（立憲政治）への支持

Cf.「経済上の事柄は官と民との差別なく始終関係すること」（渋沢栄一「伊藤公と財政経済」1910 年）

**⑨ 「渋沢男爵講話」1918 年 11 月 28 日**

吾々の本分たる商工業の完全なる進歩を期するには如何にして宜いか。自身自分の勉強は固より必要であるけれども政治と実業所謂官と民と共に力を協せて進まねば、真正なる道に届き得られぬと思ふのである。

**⑩ 『西洋事情』外編・巻之二、1868 年**

人間交際の基本は人々躬から其心力を労し躬から其責に任ずるに在り……不虞に備預せんには、平生より他人に与みして、同心協力互に相依り、小金を棄てて大難を救ふに若くはなし。→官からの独立傾向